

【主題】地域の資源を生かしたカリキュラム・マネジメントの工夫と課題

【副題】「イトヨの里」を生かした実践を通して

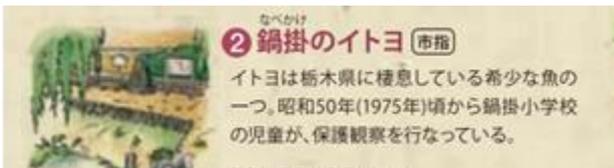
【学校・団体名】栃木県那須塩原市立鍋掛小学

【職名・氏名】 教諭 坪山 誠

1 主題設定の理由

本校の隣には、「清川」という川が流れている。ここには、市の天然記念物に指定されているイトヨが生息しており、イトヨの里と呼ばれ、地域の大切な場所となっている。また、市のHPで「昭和50年頃から鍋掛小学校の児童が、保護観察を行っている。」と紹介されるほど、本校の児童と密接な関わりがある。

しかし、生息環境の悪化に伴う生態数の減少によって、実際のイトヨを見たことがない児童も多くなることが分かった。



【市のHPにある鍋掛地区の紹介】

また、令和5年度4月に行われた「全国学力学習状況調査」の児童質問紙にある「今住んでいる地域の行事に参加していますか」の問いに対し、肯定的な意見が、本校6年生は54.9%（全国57.8%）と全国より若干低い結果だった。4・5年生を見てみると、栃木県で行われている「とちぎっ子学習状況調査」の児童質問紙にある「地域や社会で起こっている問題やできごとに関心がある」の問いに対し、肯定的な意見が4年生は70%で全国とほぼ同等だったが、「はい」と明確に答えた児童は14%低かった。5年生の肯定的な意見は66.7%（全国71.4%）とやはり全国に比べ低かった。

そこで今回の研究では、身近な「イトヨの里」を意識したカリキュラム・マネジメントを工夫することで、児童が地域のよさや地域に関わる人々の思いや願いに気づき、地域のために自分たちにできることを考え、地域での活動に進んで参加したり、関わったりしようとする態度を養えると考えた。

2 研究方法

今回の研究では、カリキュラム・マネジメントの3つ

の側面から、地域にある「イトヨの里」を生かしたこれまでの本校の教育活動を見直したり、本校の教育活動で工夫していることをまとめたり、課題を明確にしたりして、今後の教育活動を充実させる方法を考えていくことにする。以下が3つの側面である。

I 教師や複数の教科等の連携を図りながら授業をつくる (教科横断的な視点)
II 学校教育の効果を常に検証して改善する (PDCA サイクル)
III 地域と連携し、よりよい学校教育をめざす (人的・物的な体制の確保)

3 研究の実際

(1) 指導計画の工夫改善（Iの側面）

教師や複数の教科等の連携を図るために、各学年の年間計画に、各教科との関連を明示した。

学年別年間計画 第3学年（70時間）												
月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
学年プラン (70)	イトヨの里を守ろう 45時間										環境を守ろう 13時間 プログラミング学習 10時間	
学習可能な単元	国語	「わたしの町」		「わたしの町」								
	社会	「わたしの町」		「わたしの町」								
理科	「わたしの町」		「わたしの町」		「わたしの町」		「わたしの町」		「わたしの町」		「わたしの町」	
学校行事	WorkWork体験in日新										WorkWork体験in日新	

【第3学年 総合的な学習の時間 年間計画】

以下が、3年生の総合的な学習の時間の単元「イトヨの里を守ろう」と関連させた教科とその内容である。

国語	「書くことを考えるときは」「わたしの町のよいところ」 まとめる段階の書く方法の手本にした。
社会	「私たちが住んでいる市」【教務主任】 那須塩原市についての学んだことを、総合でも生かした。

道徳	「ハチドリのひとしずく」 単元のオリエンテーションで「地域の現状を知り、自分たちの学習テーマや課題をつかむ」という活動を行う際に、イトヨを守っていくためにできることは何かということについて考えた。
図工	「あの日、あのときの思い」【教科担任】 自分の思いを絵で表現する方法を生かした。

以上のように、3年生の総合的な学習の時間「イトヨの里を守ろう」の単元に各教科を関連させ、教務主任や教科担任とも連携を図る計画を立てた。4年生以上も同じような計画を立てている。

(2) 学校教育の効果の検証(Ⅱの側面)

学校評価で、自己評価や学校関係者評価で教職員や保護者に、児童は地域のことを考えているかという項目を入れたり、全国学力調査やとちぎっ子学習状況調査の児童質問紙の地域に関する項目に着目したりして、学習指導部や教務主任(地域連携教員)で総合的な学習の時間での各学年の取組状況を確認したり、見直しを行う話し合いを行った。

令和5年度の保護者アンケートでは、「お子様は地域に関心をもっているか」という質問に対し、肯定的な意見は68%と、他の項目に比べ低いことが分かった。

(3) 地域と連携した教育活動①「第3学年 総合的な学習の時間『イトヨの里を守ろう』(Ⅲの側面)

本校では、「総合的な学習の時間(なべっ子タイム)」の目標として、以下の3点を掲げており、すべてに「地域」というキーワードを入れている。

○探究的な見方・考え方を働かせ、地域の「自然・ひと・もの・こと」に関わる探究な学習の過程において、課題の解決に必要な知識及び技能を身に付けるとともに、地域の特徴やよさに気づき、それらが人々の努力や工夫によって支えられていることに気付く。 【知識及び技能】
○地域の「自然・ひと・もの・こと」の中から課題を見出し、その解決に向けて仮説を立てたり、調査して得た情報を基に考えたりする力(整理・比較・分類・関連付け・多面的な見方・考え方等)を身に付けるとともに、考えたことの根拠を明らかにしてまとめ・表現する力を身に付ける。 【思考力・判断力・表現力等】

○地域の「自然・ひと・もの・こと」についての探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、相互に助け合い・学び合いながら他者と関わる良さを感じるとともに、持続可能な社会を実現するための行動の仕方を考え、自ら社会に参画しようとする態度を育てる。 【学びに向かう力、人間性】

また目指す児童像も、本校の特徴として地域の自然を生かし「環境」に重きを置いている。

(a) 豊かな感性を持ち、進んで自然と関わろうとする子供。
(b) 環境を自然との関わりの中でとらえ、環境問題に主体的に取り組む、よりよく解決しようとする子供。
(c) 自ら環境の保全や創造活動に取り組み、具体的に実践しようとする子供。

目指す児童像の実現にむけて、以下のような指導過程で授業を行った。

ア かかわる・つかむ過程

イトヨについて、本やICT機器を用いて調べた。調べたことをワークシートにまとめ、教室に掲示することにより、たくさんの情報を可視化し、整理しやすいように支援した。また、友達と対話をしながら情報交換することで、後から分かったことや、気付いたことなども随時、ワークシートに追加して掲示していき、興味関心を常にもたせるようにした。

イ 活動する過程

本校の総合的な学習の時間の全体計画には、「①地域は教室である②地域には学習教材がある③地域には先生がいる」と明記されている。



そこで、活動する過程では、那須地区にある「なががわ水遊園」と連携し、イトヨについて学習したり、実際に清川に入り保全活動を行ったりした。

児童は事前に調べたことが、水遊園の方の話を聞いて正しいことが分かったと、とても嬉しそうな様子だった。児童だけでは調べることができなかった知識も学習することができ、幅広くイトヨについて学習することができた。

また、鍋掛地区のイトヨから育った稚魚を、一人一人が写真のように清川に放流する活動を行った。児童の感想を見ると、大きさや色をよく観察していたり、成長を見守りたいという思いが高まったりしていた。

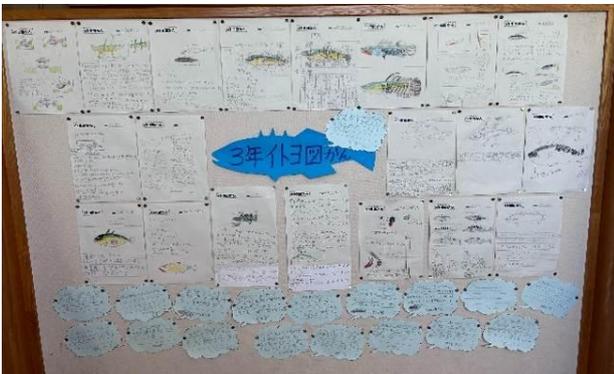


ウ まとめる課程

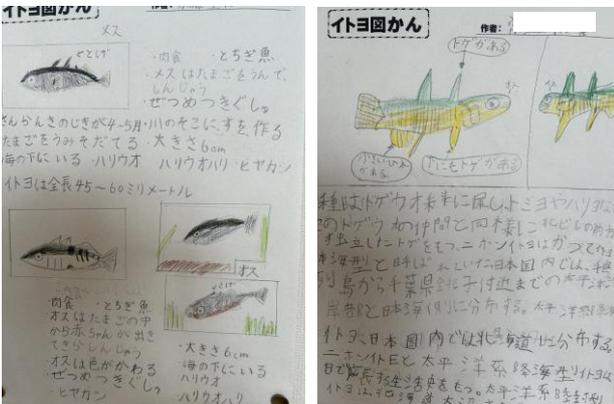
まとめる課程では、活動する課程で調べたことをまとめた。選んだ課題ごとに小グループに分かれ、児童はグループで相談して、自分たちに合った多様な発表ができるよう工夫していた。(模造紙にまとめる、スライド発表、クイズ形式など)

まとめる際には、地域の環境について課題はあるか、自分たちにできることはないかを話題にして話し合い、グループごとに話し合ったことをまとめ、発表をした。

学級内で発表した後、他学年へ発表を見せる活動も行い、学校全体で地域にある「イトヨの里」について考えた。考えたことは、「イトヨ図鑑」や「イトヨの里マップ」にまとめ廊下に掲示した。



【イトヨ図鑑】



また、イトヨについて調べたことは、その年度で終わりにするのではなく、数年にわたって継続して「イトヨの里」の地図に貼り付けていき、まとめていく方

法をとっている。以下の地図には、毎年様々な調査を行った結果を貼り付けていくことになっている。清川の水質、清川に住んでいる生き物、生えている植物、イトヨが多く見られる場所、水温の変化などである。



(4) 地域と連携した教育活動②「日新中学校区の小中一貫教育の取組」(Ⅲの側面)

本校のある日新中学校区(中学校1校・小学校2校)では、小中一貫教育のテーマを「ふるさとに誇りをもち人間性豊かにたくましく生き抜く児童・生徒の育成」と設定し、目指す児童生徒像の一つに「郷土を愛し、思いやりのある子(豊かな心の育成)」として様々な教育活動を行っている。

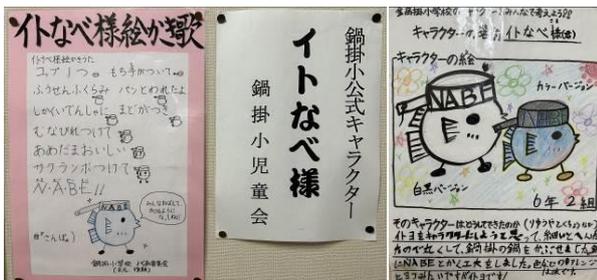
そこで、学区のふるさとの自然や活動を紹介するカレンダーを、公民館が中心になって作成している。



【日新中学校区地域カレンダー】

これらのカレンダーを児童生徒は常に見ることで、自分の学校だけでなく、中学校区の様々な自然や行事に触れることができ、郷土を愛する児童生徒が育つのではないかと考えている。

また、それぞれの学校で学校のキャラクターを考えた際には、本校では地域の資源から考えさせた。



【鍋掛小学校のキャラクター「イトなべ様」】

代表委員会が中心となって全校児童に募集した。そして、イトヨの「イト」と鍋掛小の「なべ」を合わせた「イトなべ様」というキャラクターに決定した。



【日新サミット】

日新中学校区では、小中一貫教育の取組として「日新サミット」を行っている。議題を「私たちでつくる私たちのふるさと」として、地域の方や保護者の方も招いて、3校の児童生徒と話し合った。その中で、各学校で考えたキャラクターも発表した。話し合った内容は、全校児童の前で発表し新聞にまとめ、全校生、保護者、教職員、地域の方が自分たちのふるさに愛着をもてるように発表方法を工夫した。地域の方からは、「新型コロナウイルスの影響で地域の行事が減り、地域の子供たちと触れ合う機会がなくなったり、子供たちの声がなくて寂しい」「地域の豊かな資源に子供たちにもっと触れてほしい」という意見が出された。

参加した児童からは、自分たちで考えた「イトなべ様」のキャラクターを紹介しながら、「イトヨ」に愛着をもち、清川など地域の自然を守っていきたいという思いが高まったという感想が聞かれた。

4 研究の成果と課題

(1) 研究の成果

- ・年度初めに、年間指導計画を見直すことで、他教科との関連や担任以外の関わりが明確になり、年間を見通した指導ができた。
- ・地域の環境を生かし、実際に自分たちで現地を観察したり、地域の方の話を聞いたりすることで、地域に対する興味関心が高まった。

・地域を生かす取組が、本校だけでなく中学校区全体で行うことができた。

(2) 課題

令和5年度にカリキュラムマネジメントの3つの側面を意識して取り組んできたところであるが、昨年度4年生だった児童の今年度5年生の児童質問紙の結果を見てみると、肯定的な意見が70% (R5) から、69% (R6) とあまり変化は見られなかった。しかし、肯定的な意見で明確に「はい」と答えた児童は、20% (R5) から48% (R6) と倍以上になっていることが分かった。

このことから、地域への関心が高まった児童が多かったことは成果と言えるが、一定数の地域に関心をもてない児童が存在していることが課題であることが分かった。これまでは、学級全体で同じ課題に取り組むことが多かったことから、今後は個別最適な学びや協働的な学びに取組み、すべての児童が地域に関心をもてるように教育活動を行っていききたい。

5 今後の展開

これまでの取組をまとめ、見直しを行ったところ、いくつかの課題も見えてきた。そこで、今後は以下の取組を充実させ、児童の地域に対する思いを高めるとともに、地域全体の活性化も図っていききたい。

- ・学校全体で定期的に「活動構想と評価計画の見直し」を行い、中学校との連携を図り、7年間を見通した計画を作成する必要がある。その際は、学習内容の重複の有無や発達段階に適しているか等、小中学校で連携して、指導計画の検討・修正を図っていく必要がある。
- ・指導と評価の一体化を図るため、児童生徒一人一人の学習の成立を促すための評価という視点を一層重視していく必要がある。そのためには、ICT等を活用して、教師が自らの指導のねらいに応じて児童の学びを振り返り、学習や指導の改善に生かしていくことが大切である。
- ・総合的な学習の時間で作成した資料を発表する際には、学校だけでなく公民館や学区内の学校に公開することで、より一層地域に向けて発信することができる。自分たちの地域を知るため、知ってもらうためにできることを考えて行っていく。
- ・取組を持続可能なものにするために、SDGsと関連させて課題を把握し、課題解決について考え発信していくようなカリキュラムを考えていく。